旅行業の発展によって景観地化する棚田

Rice Terraces Becoming Landscape Areas by the Tourism Industry

菊池真純*

Masumi Kikuchi*

*早稲田大学国際教養学部

*School of International Liberal Studies, Waseda University

I はじめに

高齢化と後継者不足を主な原因として、山間地・中山間地農村の著しい衰退が進み、その対策案が議論されて久しい。日本の中山間地の棚田保全に関して、中島峰広は、「棚田の基盤は拡大せず、収益性の低さや高齢化の進行などにより、棚田の耕作放棄が一段と顕著になった。」¹⁾と述べている。また本論調査地のある中国農村においても同様に、2000年には、中国の高齢者人口の65.82%が農村に居住し、農村の高齢化は都市部よりも深刻である。²⁾このように、今日、多くの地域で、高齢化や若者の農村・農業離れによる農村地域の衰退が深刻化しており、解決策を模索することは困難を極めている。

そこで、本稿では、中国南部の山間地で棚田耕作を主として農村経営を行っている平安村を事例として取り上げる。この村でも、時代の変化によって、後継者不足や旅行業による過度の開発といった諸問題が発生した。しかし、村では現在、住民の努力と政府の厳しい規制管理のもとに、棚田景観を管理・維持している。この村の特徴的な現象として、今日、村内の農業の担い手が減少する一方で、旅行業の発展によって経済的に豊かになったこの村へ、周辺の貧困農村から棚田耕作に出稼ぎに来る人々が存在し始めていることが挙げられる。今日、この村では、新たな農業の担い手を確保することによって、棚田景観を核とした農村経営の継続と発展の形態を確立しつつある。

本稿では、棚田耕作の目的が、食糧生産を主目的としたものから、景観形成のためへと移行してきている調査地の農業形態とそれを支える構造に関して、新たな担い手の参入状況を中心に考察する。そこから、時代の変化に応じながら、新たな担い手を確保し、資源と化した棚田景観を維持することによって、山間地農村の維持・発展を可能なものにしていこうとしている地域の一例を示したい。

II 調査方法

現地調査結果は、2010年3月、2012年2月と6月に、村民委員会と村民へ行ったインタビューによるものである。村民委員会は、村長にあたる村主任と書記(共産党の役職で、各地域、学校や組織のなかで風紀委員のような役割で存在している)に対して、村の統計資料や近年の変化に関してインフォーマル・インタビューを行った。村民に対する意識調査は、現在、平安村において村民のなかで差異を作り出しているのは、旅行業開始後の各家庭の収入の差異であることが村幹部のインタビューから明らかになった。さらに、中国農村では、個々人による行動単位ではなく、家族単位が生活や意思決定の基準となっていることから、年齢別や学歴別、性別による回答者の選出基準ではなく、村での経済水準を基準として、最高収入、高収入、中収入、低収入、最低収入という5つの村民のグループからそれぞれ4家庭を選出し、2010年3月に、合計20の家庭にインタビューを行った。家族の代表者として主に世帯主(家長)1名を回答者としてインタビューを実施した。

III 山間地の農村経営が直面する諸課題

上述したように、近年多くの地域で若者の農業・農村離れと高齢化による地域の衰退といった共通課題が存在する。都市戸籍の農村戸籍という二元戸籍制度を有する中国社会において、農業は貧しく、農村は発展が遅れ、農民は身分が低い、といった三農問題が、農業大国中国において深刻である。さらに、こうした貧困から抜け出すために、多くの農民が都市に出稼ぎに出ており、社会保障等を持ってない劣悪な条件のなかで、都市で出稼ぎをし、これが大きな社会問題となっており、こうした状況も農村の衰退に大きく影響している。^{注1)}

他方では、急速な経済発展に伴い、都市の富裕層の多くが週末や連休に農村へ出かけ、ルーラルツーリズムを楽しむという新たな流行が中国においても始まっている。³⁾ここでの一般的な問題は、極度な開発や商業化による農村社会の物質的、精神的な破壊である。その代表的な失敗例として、1997年に、世界遺産に登録された雲南省の麗江がしばしば取り上げられるが、中国農村での旅行業の進入のあり方は、商業優先による自然環境、民族文化、地域コミュニティの破壊を招いている例が少なくない。^{注2)}こうした状況のなか、本稿では、地域独自の農村景観を最大の資源として、地域の発展を目指す村を取り上げ、その発展形態を考察する。

IV 平安村の事例

1 平安村の概要

平安村は、中国南部の広西壮族自治区龍勝県和平郷の東北部に位置し、村のなかには、平安一、平安二、平安三、平安四、平安五、平安八、三龍、福祿という8つの集落が存在する。村全体では180戸797人が生活を営んでおり、その98%以上が壮族で、姓は廖である。村全体の耕作地面積は901畝^{注3)}であり、そのうちで水田は600畝である。

図1 平安村の棚田

Fig.1 The trend of The Rice Terraces in Pingan Village.

注：1) 筆者撮影(2012年6月)。

彼らの祖先は、山東省を起源とするが、宋の時代に慶遠府南丹州(現在の広西南丹)に移り、その後、元の時代から同地域の山で生活をはじめたとされている。これら移民の経緯には、戦乱や民族差別による弾圧から逃れてきたことが背景に存在する。1994年に、桂林のカメラマン李垂石がこの村の棚田景観を世間に紹介したことをきっかけに、棚田景観が大きく評価され、村を訪れる旅行

者が現れ始めた。1996年から、外部者が村に入る際に村民独自で中国人1人3元、外国人1人5元でチケットを売り、管理を始めたのが平安村での旅行業の最もはじめの段階といえる。地理的にも辺鄙な山地に位置するため、それ以前の平安村は、外部との交流は少なく、閉ざされた環境のなかで、ほぼ完全に近い自給自足の生活を600年以上行ってきた地域であった。

2 旅行業の発展

1999年から、旅行会社が公式に旅行者に対する入場チケットの管理をはじめ、そのチケット収益の一部を平安村に分配しはじめた。旅行会社が村民に対して分配する際、当初はこれを「進寨費(入村費の意味)」と呼んでいたが、棚田保全のために使用するという名目のもと後に、「梯田維護費(棚田維持費の意味)」という名称に変わった。現在、このチケットは、旅行者1人につき50元となっている。旅行会社から村民に分配されるチケット収益の一部は、平安村村民の旅行業収入のなかのごく一部分であり、その他に、大部分の家庭が民宿や飲食店を開いて収入を得ている。

表1は、旅行会社が管理する村への入場チケットによる収入を一定の比率で平安村に分配しはじめた1999年から2007年までの龍脊棚田風景区の入場チケット収入と平安村の全体所得を示したものである。これは、旅行会社が管理するチケット収益全体の額であり、ここから7%が村に支払われ、さらに村内の各戸に分配されている。

表1 平安村における龍脊景区入場チケット収入と平安村所得の変化

Table 1 The outline of The Ticket Earnings and The Total Income of Pingan Village

年	チケット収入(万 RMB)	平安村所得(万 RMB)
1999	23.41	2
2000	37.93	2.5
2001	62.6	3
2002	209	15
2003	263	15
2004	539.22	35
2005	756	35
2006	958	35
2007	1276	73

注：1) 平安村村民委員会提供資料。

2003年に国道321が龍勝から桂林まで完全開通し、この間の移動時間はわずか1時間半となった。表1をみて

もわかるように、この開通を前に、すでに2002年以降、大型バスを利用した団体旅行のコースに組み込まれはじめたため、大幅な収入の増加が見られる。したがって入場チケットは、2001年の62.6万円が2002年には約3.3倍の209万円へ増加し、平安村の所得は、2001年3万円から翌年2002年には5倍の15万円と大幅に増加している。その後も、年々大幅な伸びがあることが確認できる。

2009年から、平安村の入り口に「平安村概要」と書かれた看板が設置されはじめた。そこには、村に関する簡単な紹介と共に、「平安村はすでに旅行業を主要産業とし、農業はそれを補う産業となっている」という一文が明記されている(図1、6～7行目:「目前、村内已形成以旅游业为主、农业为辅的产业格局。」)。

図2 平安村入り口にある村を紹介する看板

Fig. 2 The trend of The Introduce of Pingan Village

注: 2) 筆者撮影(2010年3月)。

3 政府の規制による棚田の整備

旅行業がはじまってから2005年までの間、政府といくつかの旅行会社の協同によって、旅行者への入場チケットや村内の歩行道の整備、村民への棚田耕作継続の指導や建築規制の指導といった管理が行われてきた。その後、2005年以降は、現在の桂林市温泉旅行有限責任公司という旅行会社が村の旅行業全体を管理している。この旅行会社も政府との協同が強く、多くの村民は、「旅行会社=政府」という認識をしている。

入場チケット管理の以外に、平安村の棚田保全に対する政府の制度規制による介入は、様々な形式で行われている。龍勝県政府旅游局は、1999年から、村内の小道の整備、展望ポイントの設置、村民に対する棚田景観保全の呼びかけ、対外への村の宣伝活動を行い始めた。その後、2005年から龍勝県政府が平安村に「県級景区管理室」を設置し、現在に至る。この主な任務は、棚田景観を保全するために、家屋建築の場所を規制するものである。

これまでは棚田周辺に関する規制が中心であったが、

2008年からはさらに具体的に棚田耕作に関する内容への規制が、龍勝県農業局の管轄のもと行われるようになった。具体的には、畦の草刈、耕作放棄地の消滅、農閑期にも水を張り保水田を形成して景観を保つこと、春には棚田に菜の花を植えて景観を保つことなどが挙げられ、それに対する技術指導や補助金の導入が行われている。また、高齢者のみの家庭をはじめとして、その家庭で自家の田の耕作が困難な場合は、他者に委託することを義務づけられている。

また最も新しい規制は、2月末から3、4月にかけて棚田に植えられている菜の花プロジェクトである。旅行会社が主導となり、1畝あたり100元分の菜の花の種や肥料にかかる費用を旅行会社が農家に対して負担し、その後さらに、1畝あたり100元の補助金を農家に支払っている。この後者の100元に関しては、検査基準は厳しいものではないものの、開花後の検査を経て、合格した農家に支払われている。この菜の花の栽培は農業本来の目的ではなく、農閑期である初春の棚田景観に彩りを添える、完全に旅行業のための意図的な景観形成となっている。

平安村では旅行会社と政府の風景区維持・管理に対する介入が大きく、厳しい管理指導を受けていることによって、1年を通して風景区の行き届いた棚田管理を実現させている。政府と旅行会社が旅行業によって利益を上げようとするうえで、2号風景点と呼ばれる七星伴月風景点は、平安村の顔となっている。観光バスでこの地域に訪れ、ここで宿泊をしない団体旅行の一行は、一般的に時間の制限により、平安村の2号風景点のみを参観する人が多い。したがって、政府と旅行会社は、2号風景点の棚田整備に対して、他の地域よりもさらに集中的に管理指導や菜の花栽培の際の補助金の投入に力を入れている。

こうした状況によって、自分たちの村では現在、旅行業のために棚田耕作を行っているのであり、棚田耕作は補助金や給料を受け取って行うという考えが住民たちに根付きはじめ、村では農業が主体ではなく、旅行業が主体となっている、という認識をさらに強めている。旅行業が始まり、政府の管理が厳しくなったことによって、それ以前よりも棚田景観が美しくなったと述べる村民が多くみられた。

4 村内の担い手不足

旅行業が地域に進出し、村に農業と旅行業の兼業化が生まれた。その結果、まず、(1)地域内住民の階層分化が発生した。①複数の旅館を経営する者、②一軒の旅館を経営する者、③飲食店を経営する者、④工芸品店を経営する者、⑤路上で工芸品を売る者、⑥旅行者に地域内を

案内する者、⑦旅行業にはほぼ関与しない者、というように地域住民の旅行業への様々な参入形態があり、それによって仕事と生活の形態が人によって異なり、経済収入も異なる。この点が、地域で皆が自給自足をしていた十数年前までの生活とは変化した最も大きな点である。次に、(2)家族内での役割分担の明確化が挙げられる。調査のなかでは、1つの家庭のなかで、若者である息子夫婦は農業には携わずに村内で旅行業に携わる、或いは出稼ぎに出て村を離れ、高齢者の父と母が村で農業に携わるといった形態が一般的になっている。これも兼業化による家庭内での差別化である。こうした若者の農業離れと農業従事者の高齢化は、他の山間地農村同様に、平安村においてもみられる現象である。

棚田耕作を行う目的を農業と旅行業の関係のなかから村民に意識調査した結果、以下の回答が得られた。

図3 棚田耕作を行う現在の目的(複数回答)

Fig. 3 The trend of The Purpose of Farming Rice Terraces

図4 将来的な棚田耕作の動機(複数回答)

Fig. 4 The trend of The motive of Farming Rice Terraces in the Future

図3の現在の棚田耕作を行う目的において、半数が「旅行業のため」と回答をし、6名が「食糧生産のため」、4名が「旅行業と食糧生産のため」と回答をした。図4の将来の棚田耕作の動機としては、さらに多くの過半数を超える16名が「旅行業のため」と回答をしている。

図5 子女に対する村内定住への意向

Fig.5 The trend of The Hope to Posterity Settle Down in The Village.

また将来、自分の子供たちに村に残って生活をしてほしいと望むか否かに関する質問には、図5で示したように、同じく大規模な棚田を有する近隣の大寨村村民の大部分が望むと回答しているのに対して、旅行業の発展している平安村では、望まないという回答が最も多いことがわかった。

この理由として、旅行業の発展による経済的余裕や道路等インフラの整備によって、村民の教育水準も大きく向上したことが背景に挙げられる。近年、全ての子供が小中学校の義務教育を終え、高校への進学者も毎年約60~70%となっており、さらに近年では、毎年2~3人の大学進学者を出している。村では高等教育の支援として、村からの大学進学者に対して、入学時に2000円の奨学金を支給している。村の書記の子息もインタビュー時に、広西の政令指定都市である南寧市の大学の学生であった。廖書記も、自身の子供が将来平安村に戻って生活することには強い反対の意向を示しており、平安においては、多くの家庭の父母が同様の意見を持っている。この最大の理由として、農村での苦労を自分の子供にはさせたくないという考えがあり、可能であれば自分の子供には都市での発展・飛躍を望むという考えがあることがわかった。

5 平安村に出稼ぎに来る人々

棚田があることで旅行業が発展しはじめ、今日の平安村が存在する。つまり、棚田がなければ、旅行業が成り立たないといえる。しかし、今日、若者の農業離れによって、村内における農業の担い手が不足し、それは今後さらに顕著なものとなることが予想されている。こうしたなか、一方で、今日、村における新たな農業の担い手として、周辺の極貧農村から平安村に棚田耕作に来る出稼ぎの人々が存在し始めている。

現在、平安村において、景観地とされている地帯は100%耕作を行っており、耕作放棄地は存在しないが、旅行者が訪れることはほぼない村の奥には耕作放棄地も存在する。こうした村内の全ての棚田を包括してみると、現在、平安村での耕作放棄地は、全体のなかで約18%存在し、残りの82%を耕作している状況である。

中国において、土地は、個人のものではなく、国家あるいは集団に属するもので、個々人は単にその使用权を有する。平安村でも、村から各戸に耕作地が分配されており、村内の棚田や家屋等の土地は全て村民に使用权がある。現在も耕作を行っている棚田の耕作者の内訳をみると、自分たちの家庭に分配されている棚田を自家で耕作している村民の割合は約65%であり、自家で耕作を行わず、村内の別の家庭に耕作を委託している割合は約30%存在する。さらに、自家で耕作を行わず、また村内の他の家庭に委託をせず、周辺農村から平安村に出稼ぎに来ている農民に委託している割合は約5%となっている。そこでの具体的な棚田耕作の委託条件は、一般的に、他の村民に耕作を委託する場合には、自家の棚田周辺の村民に委託をし、そこで収穫した米は、全て委託された側のものとなる。

村外部の周辺地域から出稼ぎに来る農民に対しては、委託する側が、出稼ぎの人々に対して食事と宿泊場所を提供し、住み込みによって棚田耕作を委託する。さらに1日25元の賃金を支払うのが一般的であり、村では、この食事代と宿泊場所の他に、賃金100元を支払うのが一般的である。これは、先に示した平安村の所得平均から考えても非常に高い金額であり、現在、出稼ぎの人々を雇うことができているのは、外部から投資を受けて旅館を開いている村内でも最富裕層にあたる家庭である。

現時点において、棚田耕作に村に出稼ぎに来る周辺農村の農民の割合は、約5%程度である。しかし、旅行業の村への進出や若者の出稼ぎによって、村内で他の家庭に棚田耕作を委託する人々が、現在すでに約30%存在することから、今後も村内外への委託が進んでいくことが予想されている。さらに、村民委員会では、将来、村内で棚田耕作を行う人々が存在しなくなることを予想し、政府が周辺農村地域から農民を集め、政府の雇用のもとに、平安村の棚田耕作が行われていく可能性を示唆している。

V 景観地化する平安村の棚田への評価

1 肯定的に評価できる点

平安村では外部の変化に伴い、地域内部の変化が生まれているなかで、制度による規制を通して、農村景観の

動態的保全を行っている。平安村では、外部要因の影響を大きく受けたことによって、地域内の人々の価値観の変化、また資源管理をはじめとする地域内での規則・規範の変化が生じ、地域の人々の生活を変化させた。それに伴い、地域生活の総体的表現である農村景観にも変化が生まれることとなる。しかし、こうした一連の変化のなかでも、旅行業の重要な資源である農村景観を保全していくために、政府・旅行会社が設けた制度によって、景観管理が実現されている。先に示した地域住民の回答にもみられたように、旅行業開始以前よりも現在の棚田は整備され、農村景観は美しくなってきたという理由は、この制度での規制による成果だと考えられる。換言すれば、時代の変化と共に人々の生業が変化したことによって、本来、崩壊・消滅するはずの地域の伝統的農村景観を強制的に整備・維持している状況である。これに関して、現在、平安村の農村景観は、制度によって保全・維持され、景観地化する傾向が強まってきているが、これも時代の変化のなかでの1つの動態的保全の形といえることができる。

これまで述べてきたように、平安村は、外部からの旅行者の需要に敏感に反応して、すでに市場経済に対応した旅行業を確立している。したがって、インフラ、商業施設、景観が整備されており、大量の短時間滞在旅行者を受け入れているため、村の住民の平均収入も周辺地域から抜きん出て多い状況である。これは、貧困地域とされてきた中山間地域農村の発展という枠組みのなかで、1つの成功として評価をすることができる。

2 新たな課題

今日、平安村において棚田の役割に変化はあるが、棚田を地域最大の資源として、今後も発展を目指していく村内で、外部から出稼ぎに来る人々をどう捉え、また本来、平安村の壮族文化の一つである棚田耕作を出稼ぎの人々が行う場合、その文化的意義はどう変化するかという課題が挙げられる。

出稼ぎに来る周辺地域の人々もまた類似の地域環境のなかで農業を営む農民であることから、将来、仮に大部分の棚田を彼らが耕作する状況になったとしても、棚田は整備・管理されていくと考えられる。しかし、農村景観を形成する要素は、単に農業技術のみにとどまるものではなく、そこで暮らす人々の民族や宗教といった文化的要素をも包括しているものである。今後、平安村村民が棚田耕作には関わらないようになれば、それは、壮族が600年以上この地で棚田を中心とした生活のなかで築き上げてきた文化は失われることを意味すると考えられる。この文化の変容は、社会の変化と旅行業が生み出し

た1つの弊害であるといえるが、しかし、伝統文化や生態環境を守るために、地域の人々の生活を限定的なものとして犠牲にするのであれば、その発展形態は持続可能なものとはいえない。新たな農村運営形態が展開され始めている現在、出稼ぎに来る人々も、村の共同体の構成員に変わりはない。

平安村は、外部との交流のない自給自足による地域内での自己完結型の生活から、外部社会との交流・連携・補完による関係性のある生活へと変化を遂げてきた。それに伴って、地域に関わるアクターが地域住民の枠を超えた多様化と広範囲化が進むなかで、共同体の構成員は、こうした外部のアクターを含んだ多様化・広範囲化した共同体のあり方を認めて発展を目指す必要がある。村民が村の将来の方向性を決定し、地域の主体アクターであることは重要であるが、すでに現在、政府・旅行会社・出稼ぎ農民・旅行者といった多様なアクターが、様々な方法を通して地域の農村景観の維持と活用に貢献している。地域の農村景観が資源として存在するためには、こうした外部社会の多様なアクターの協力・支援を得て協働していくことが必要不可欠である。

VI おわりに

今日、一部の地域における農業の目的は、従来からの食糧生産を目的とする以外に、環境保全・景観保全のための目的に移行している地域が存在している。例えば、本稿調査地の平安村と揚子江周辺の平野地農村を従来の農業の基準によって比較した場合、その収穫量・品質・農作業の効率の全てにおいて、平安村が大きく劣ることは容易に結論づけられる。しかし、従来の農業の目的以外に、第2の目的が市場経済と社会のなかで確立しはじめたことによって、豊かな森林資源のなか少数民族が生活を営む棚田景観を有する村の特徴を活かすことが可能となった。ただし、景観保全のための農業は、農業のみ

ではなく、農業と平行して旅行業の発展が必要となる。新たな農業の目的と形態は、これまで農産物の生産量が低く、貧困地域とされてきた農村における活路を生み出しているという点からも肯定的に捉えることができる。多面的な機能を持つ農業という産業は、必ずしも食糧生産のために行われるべきと限定されるものではなく、食糧生産以外にも多様な目的・形態が存在して良いと考えられる。またそこに携わるアクターも、時代の変化に伴って多様性を認めていく必要があると考えられる。

注

注1) 統計によると、2009年11月には、中国全土で、1億5200万人の農民が都市に出て、出稼ぎをしている。陳錫文(2010): 当前農業和農村經濟形勢於“三農”面臨的挑戰: 中国農村經濟, 中央農村工作, 第1期, 北京, p. 5.

注2) 麗江に関して、李公明は、「政府と業者、それに御用達学者が加わって利益を追い求め、少数民族本来の暮らしという視点を欠いた観光振興は問題だ」と指摘している。世界遺産登録後から現在まで、地域住民であった納西族の半数以上が、地域の商業化を嫌い、移住を選択している。読売新聞、2010年1月30日。

注3) 1畝(ム一)=0.0667haである。

引用文献

- 1) 中島峰広(1999): 日本の棚田—保全への取り組み。古今書院, 東京, p. 17.
- 2) 邵興華(2007): 農村人口老齡化若干問題研究: 中共烏魯木齊市委党校学報. 第1期, 烏魯木齊, p. 23.
- 3) 何麗芳(2006): 鄉村旅游於傳統文化. 地震出版社, 北京, pp. 169-171.
- 4) 李富強(2009): 現代背景下的鄉土重構: 龍脊平安寨經濟与社会変遷研究. 科学出版社, 北京, p. 56

Summary: Most of mountainous regions in Asian countries have seen penury and aging. It is serious problem in long time. As an example I would like to point out Ping-an village, Guangxi, China. They have been self-sufficient through the cultivation of rice terrace. Nowadays when the development of existing resources in less-favored rural areas is aimed, the rural landscape until now never considered as resource, may turn out to be the most valuable one. At the same time, the rice terraces becoming landscape areas by tourism industry in Ping-an village. Thus the observation of the process of change of the rural landscape into resource becomes possible.

キーワード (Keywords): 中国農村 (Countryside in China), 棚田 (Rice terrace), 景観地 (Landscape Areas), ルーラルツーリズム (Rural Tourism)

(2012年5月20日 受付)
(2012年9月16日 受理)